

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13005

研究課題名（和文）国会／議会におけるやじをもとにした政治コミュニケーションの日英対照研究

研究課題名（英文）A comparative study of heckling at the Diet in Japan and the Parliament in the U.K.

研究代表者

柳田 亮吾（YANAGIDA, Ryogo）

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：00756512

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の国会と英国の議会におけるやじに焦点をあて、国会／議会の討論において話し手である議員がどのような言語行動を行っているのか、それが受け手の議員、あるいは、ジャーナリスト・メディアの受け手にどのように判断・評価されているのか、そして、その判断・評価がどのような価値観・イデオロギーに依拠しているのかの三つを総合的に分析・考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本の言語・コミュニケーション研究ではほとんど扱われてこなかった政治の場におけるコミュニケーション（特にやじとそれへの応答）を取り上げ、話し手のみならず聞き手の役割を考慮し、「丁寧」な言動だけでなく、「丁寧」でも「失礼」でもない適切な言動や「失礼・無礼」な言動を分析することで、コミュニケーションにおける対人関係的側面の理解を深化させた。

研究成果の概要（英文）：This study analyses interactions initiated by heckling at the Diet in Japan and the Parliament in the UK, and reveals the following: how the members of the Diet and the Parliament heckle, how the recipients of the heckling or those who watch the heckling, such as journalists or laypeople, judge and evaluate it, and what cultural values or ideologies such judgements and evaluations are based on.

研究分野：社会言語学／語用論／談話分析

キーワード：イン／ポライトネス やじ 国会／議会 政治的談話 政治コミュニケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

Robin T. Lakoff が 1989 年に *The limits of politeness: therapeutic and courtroom discourse* と題した論文を発表して以来、欧米のイン/ポライトネス研究はより広範なジャンルの談話を分析し、日常会話とは異なる言語使用と人間関係の様相について考察を行ってきており、政治的談話を扱った研究も徐々に注目を浴びつつある（例えば Garcia-Pastor 2008, Harris 2001, Pérez de Ayala 2001）。

これまでの欧米の談話研究において政治は重要な研究課題の 1 つであったが、政治的談話における「やじ」に関しては、社会心理学（例えば英国議会のやじを分析した Bull and Fetzer 2010, Bull 2016）や会話分析（Atkinson 1984a, b; Clayman 1993）の観点からの研究が散見されるのみであり、イン/ポライトネスの観点の研究はなされてこなかった。

また、日本の談話研究においては、近年「政治と言語」というテーマの研究がいくつか発表されつつあるものの（例えば松田編 2008、秦・佐藤・岡本編 2020 など）、政治的談話を分析した研究そのものが少数にとどまっており、イン/ポライトネスという枠組みでの研究はほとんどなされてこなかった。

こうした中、近年日中のやじに関するメタ語用論的な談話を分析した Kádár and Ran (2015) や、やじと儀礼の関係を論じた Kádár (2017) といった研究が徐々になされ始めている。本研究はそうした研究と並ぶ、政治的談話におけるやじをイン/ポライトネスの観点から分析する先駆的な研究である。

2. 研究の目的

本研究は日本の国会と英国の議会におけるやじに焦点をあて、やじを起点とした政治コミュニケーション（国会/議会での討論という相互行為、テレビ・新聞等のメディアによる媒介、市井の人々の受容）を分析する。分析においては、ポライトネス研究に批判的談話分析とオーディエンス研究の知見を統合し、コミュニケーション全体を俯瞰することのできる包括的な分析枠組みを用いる。対人関係的談話実践における利害・関心と感情を分析の主軸とし、国会/議会の討論において話し手である議員がどのような言語行動を行っているのか、それが受け手の議員、あるいはジャーナリスト・メディアの受け手にどのように判断・評価されているのか、そして、その判断・評価がどのような価値観・イデオロギーに依拠しているのかの三つを総合的に考察し（図 1）、日本と英国それぞれにおけるやじという言語行動の諸相を明らかにする。

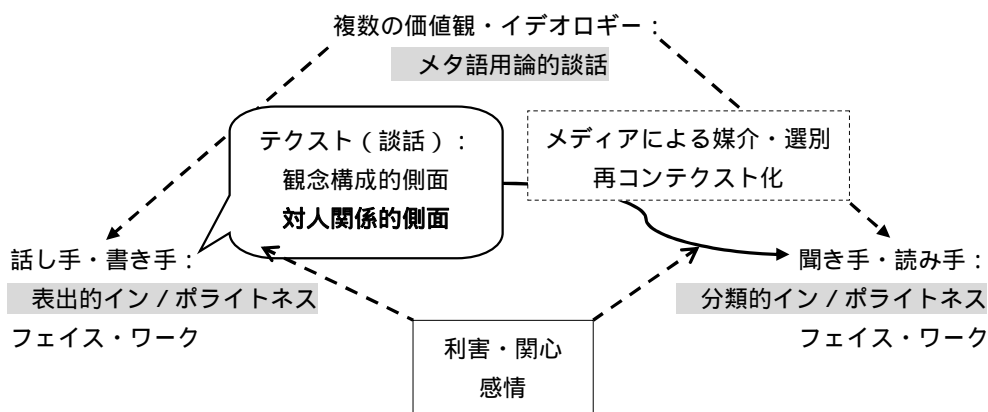


図 1：対人関係的談話実践の 3 つの側面

3. 研究の方法

(1) 日国会/英議会内におけるやじを含む相互行為の分析

やじの言語形式とその機能の分析（表出的イン/ポライトネス）を行う。やじが誰から誰になされているか、その言語行為（支援的か批判的か）を分析する。また、やじる議員の政治文化的背景（所属政党、支持する政策、ジェンダー）とそこから派生する利害/関心、利用できる資源（答弁時間、党員数）の観点からその言語実践の戦略を分析する。

やじに対する国会/議会での評価実践の分析（分類的イン/ポライトネス）を行う。やじられた議員、その他の国会/議会に居合わせた議員の政治文化的背景、利用できる資源に注目し、評価実践の戦略を分析する。国会/議会という独自の実践の共同体においてやじはどのような感情を生起させ、どのように（有標あるいは無標）と評価されているか、独自の規範がどのように交渉されているかを分析する。

(2) 日国会 / 英議会外にて下されるやじの評価の分析 (分類的イン / ポライトネス)

国会議員とは異なる利害 / 関心 (ニュース価値の追求) を有しているジャーナリストがやじをどのように評価しているのかを分析する。上のジャーナリスト達の報道の受け手である市井の人々が、報道を踏まえやじをどのように評価しているかを分析する。

(3) 日国会 / 英議会の言語実践 (表出・分類) をするにあたって基盤となる談話の分析 (メタ語用論的イン / ポライトネス)

やじとその応答を含む相互行為がどのような評価概念 (例えば「丁寧」, "polite"あるいは「失礼」, "rude") によって肯定的あるいは否定的に評価されているのかを分析する。また、やじを評価するにあたってどのようなメタ語用論的談話 (例えば「議会の華」) が参照され、利用されるのかを分析することで、より広範な日本・英国社会における道徳的な談話群との接点について考察を行う。

4. 研究成果

(1) 日国会、英議会における相互行為は制度化されており、発話の順番順番取りは基本的にあらかじめ決められた形で進行していく。まず初めに議長・委員長による開会の宣言があり、その後議長・委員長が質問者を指名し、質問者による発言があり、その後議長・委員長による応答者の指名を経て応答者が発言をする。この質疑応答を繰り返し、最後に議長・委員長による閉会の宣言がなされる。日国会、英議会の双方において、やじなどによって議員の発言を妨げる言動は明文化された規則によって禁止されている。しかし、実際には、やじなどの制度化された発話の順番取りからの逸脱行為は、国会・議会における相互行為の「審判」たる議長・委員長によって制止されるものの、慣習的に寛容されている。やじの内容は発言者の発言内容を支援するものと、非難するものがあるが、後者の相手のフェイスを侵害するものが数としては圧倒的に多い。従って、やじの多くは相手のフェイスを侵害すると同時に相手の社交性の権利 (Spencer-Oatey 2005, 2008)、つまり、話す権利の 2 つを同時に侵害する行為であると言える。

(2) フェイスと社交性の権利を侵害するやじへの対応策としては以下が観察された (図 2)。やじへの対抗策に関して日国会と英議会で大きな相違は見られなかったが、後述の「無言の抗議」は日国会でのみ見られた。

「メタコメント」は、やじられた議員がやじに対して「静かに」など応じ、やじが自身の話す権利を侵害していることを主張する戦略である。これに対して、「コメント」はやじが自身の社交性の権利を侵害していることを主張するのではなく、やじの内容に対して応答する戦略である。例えば、「反駁」は自身の発言に対する批判を含むやじに対して反論するという戦略である。また、やじに対して何もしない、つまり「沈黙」を保つという戦略が取られることもあった。「無視」は自身の社交性の権利を主張し、やじに全く取り合わないという戦略であるのに対して、「無言の抗議」はやじられた後にあえて沈黙を保ち、自身の義務を果たさないことで、やじの不適切性をほめかす戦略である。

やじの適切性は、やじられた議員がどのような対応策を取るか、そして、議長・委員長がやじとやじへの対応をいかに判断・評価し、裁定を下すか、相互行為において交渉されることになる。

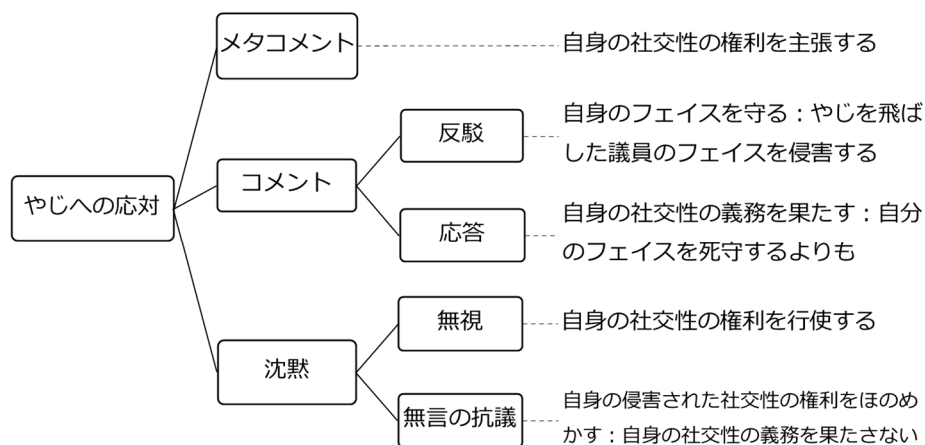


図 2 : やじへの対応

(3) 日国会と英議会におけるやじを起点としたコミュニケーションをイン / ポライトネスの観点から比較・対照すると、両者には相違点よりも類似点を多く見出すことができた。ただ上述のように、日国会においてのみ見られたやじへの対応策としての「無言の抗議」は、話すこと、あるいは、話をあえてしないこと (沈黙) に関する文化的な価値観を反映しているということもできるかもしれない。この点については今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Seiko Otsuka & Ryogo Yanagida
2. 発表標題 A study on “mounting”: A new interactional concept related to im/politeness in Japanese
3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柳田亮吾
2. 発表標題 国会討論におけるイン/ポライトネスの動態：やじとそれに対する応答に注目して
3. 学会等名 第18回動的語用論研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Ryogo Yanagida & Seiko Otsuka
2. 発表標題 Eloquent silence as a counter-heckling measure: An analysis of parliamentary debates at the Japanese Diet
3. 学会等名 CADAAD Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山下仁・大塚生子・柳田亮吾
2. 発表標題 イン/ポライトネス研究の地平
3. 学会等名 第30回情報保障研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryogo Yanagida & Seiko Otsuka
2. 発表標題 Heckling initiated interactions at the Japanese Diet
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柳田亮吾
2. 発表標題 国会討論におけるイン/ポライトネスとジェンダー
3. 学会等名 第23回日本語用論学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大塚生子、柳田亮吾、山下仁	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 384
3. 書名 イン/ポライトネス研究の新たな地平：批判的社会言語学の広がり	

1. 著者名 滝浦 真人、椎名 美智、阿部 公彦、大塚 生子、佐藤 亜美、福島 佐江子、柳田 亮吾	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 イン/ポライトネス からまる善意と悪意	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------